

震災からの復興活動に取り組むリーダーを、
短期・中期・長期の3つのフェーズで支援します

震災復興リーダー支援プロジェクト

Support our Disaster Recovery Leaders – Relieve, rebuild and re-start Japan

経過報告レポート (2012.6.12-2012.9.11)



1

「復興人材作戦会議」を開催

震災から1年半が過ぎ、生活拠点が避難所から仮設住宅に移るなど目まぐるしく状況が変わった復旧段階から、目に見えて状況が変わらない復興の踊り場に入りました。このような状況の中で支援のあり方も次のステージに進む必要があると考え、8月4日(日)に復興人材作戦会議を開催しました。「人材が足りない」という声が被災地から上がる一方、具体的にどんな人材が入りどんな役割を担えば事が進むのか、分かりにくいのが実情です。そこで、どんな人材が求められているかについて、現地のプロジェクトリーダーや右腕、震災復興リーダー支援プロジェクトをご支援いただいている企業や団体の方など約30名の方と議論しました。多様な立場からの議論の結果、(1)地域住民に必要とされている資源や情報を繋ぐコーディネーター的人材、(2)事業の立ち上げに必要なスキルを持ったビジネスパーソン、(3)地域の自立を支え、意志ある大学生、が大きく必要とされているのではないかと話が挙がりました。地元でUターンしたり、長期的に派遣をしたりするだけ

でなく、企業からプロボノ人材を派遣することができないかなど、具体的な関わり方を模索する議論が交わされました。ゲストには、右腕派遣先のリーダーである株式会社ファミリア代表取締役／東北Rokuプロジェクトプロデューサーの島田昌幸氏、つなプロ気仙沼 代表の川崎克寛氏、一般社団法人Bridge for Fukushima 代表理事の伴場賢一氏、一般社団法人RCF復興支援チーム代表／内閣官房防災ボランティア連携室室員の藤沢烈氏をお招きし、現地のニーズや現状の課題について語っていただきました。

— 藤沢烈 氏(一般社団法人RCF復興支援チーム代表／内閣官房防災ボランティア連携室 室員)

国が作っている制度が、被災地になかなか届いておらず、二重ローンなど住宅再建に悩む被災者も多い。1人で悩み、再開を諦める被災中小企業の経営者も少なくない。信頼できる人からわかりやすく情報が伝わるよう、仕組みをつくるラストワンマイルの支援が鍵である。また、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震時と違って、外部支援者間や、住民・行政との連携にも課題がある。高台移転にともなうコミュニティづくりや、長期的な支援施策づくりを市町村がおこなっていく必要があるが、慢性的にマンパワー不足である。住民、行政、支援者による連携のためのプラットフォームづくりが求められている。

Contents

Contents

- P1-3 復興人材作戦会議を開催
- P4-5 リーダーアンケート分析
- P6 Global Giving コミュニティ元気ファンド
- P7-8 今期のトピックス
- P9 進捗報告 (財務状況／派遣人数)
ご支援・ご寄付のお願い

一 島田昌幸氏(株式会社ファミリア代表取締役)

現在は、6つの会社で共同で事業に取り組み、農業の6次産業化をサポートしている。農林漁業者がタッグを組み、グループ化して6次産業化に取り組んでいかなければいけないと思っている。東北の復興はがれき撤去から変化し、雇用を生み出すようなフェーズに来ている。農業従事者や障害者であったり目が届きにくいところの雇用を手がけていきたいと考えている。復興のフェーズごとに必要な人材は違う。右腕も事業立ち上げ期と事業拡大期では違う人材が必要である。雇用を生み出すのはテクニカルな面も必要で、人事、総務、経理などのプロフェッショナルな人材が求められる。商品開発などある程度、プロジェクトベースな仕事もあるが、広報など、継続的な企業イメージの醸成などに取り組む広報などは長期で関わってくれる人材が必要であり、事業実施主体者になれる人が求められている。コンサルタントばかり増えても意味がない。



一 伴場賢一氏(一般社団法人Bridge for Fukushima代表理事)

福島市は、震災前は人口の約10%が農業に従事しており、産業としては下請けが多かった。発電に関する事業も多い。震災による被害の状況は宮城に比べると少なかったが、原発の影響もあって動きだしは遅かった。ボランティアも大量には入ってきていない。Bridge for Fukushimaでは、昨年度にボランティア派遣を13回ほど開催し、600人に参加いただいた。現在は中間支援団体として、県内のNPOや団体にハンズオン支援を行っているが、人口の流出が他県に比べ急速に進み、圧倒的な人材不足に陥っている。また、震災後すぐは23%しかミネラルウォーターを使用していなかったが、現在はほぼ100%が使用しており、中にはお皿を洗う時に使用する人もいる。福島には単純なボランティアもまだまだ必要なのが現状。一度来て現地の匂いを感じてもらい、また戻ってもそれが思い出される仕組みをつくらないといけないと思っている。



一 川崎克寛氏(つなプロ気仙沼 代表)

気仙沼大島では全島アセスメントを行い972世帯のニーズ調査を行った。その情報を色んなステークスホルダーの方と協議し、2月に再度アセスメントも実施。大島は4割が高齢者であり、3年後には高齢者率56%と言われている。地縁血縁が強い地域でもあるので、お互いがお互いを支え合うようなセーフティネットを作る必要があると考えている。また、島の中には二重債務を抱えている人がいるが、「書いてある制度が分からない、どう申請したらいいのか分からない」という人が多く、情報をうまく伝えていかなければいけない。

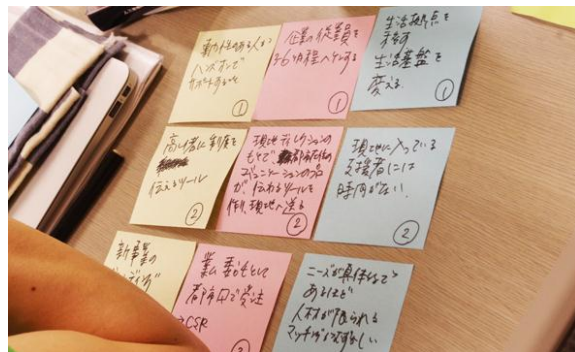
人材のニーズとしては、受け身ではなく能動的に動ける人が必要である。つなプロは大学生が多く不十分な面もあったかもしれないが、彼らのおかげで地元の人たちが強くなっていった。地元住民と対等な立ち位置で動いていける人が必要だと思っている。



ゲストの話の踏まえて、参加者とともに行ったワークショップでは、以下のような意見がありました。

- 地域の人たちと同じ言語でコミュニケーションを取れて地域からの信頼があり、外の資源をつなげていく人が来年、再来年と必要になっていく。信頼関係と情報をパッケージで発信できるコーディネーターが必要なのではないか。
- 企業としての関わり方が見えづらい中で、現地と企業のつなぎ手となる人材が必要ではないか。また、企業の人材育成プログラム等と復興の過程が連携する可能性を考えたい。
- 地域と伴走しながらスタートアップの取り組みを育てていく人材を供給していく機能や、地域の人材が成長しあえるコミュニティづくりの機能が現地にも必要なのではないか。そのための資金援助を、考えなければいけないのではないか。

- 現地と企業のCSR事業部門で商談会をするような場づくりが必要ではないか。支援の提供側・支援を受ける側という議論をやめ、主体者としてのコミットメントが非常に重要であるのではないか。



震災復興リーダー支援プロジェクトでは、今後もこのような機会を設け、議論を深めてまいります。

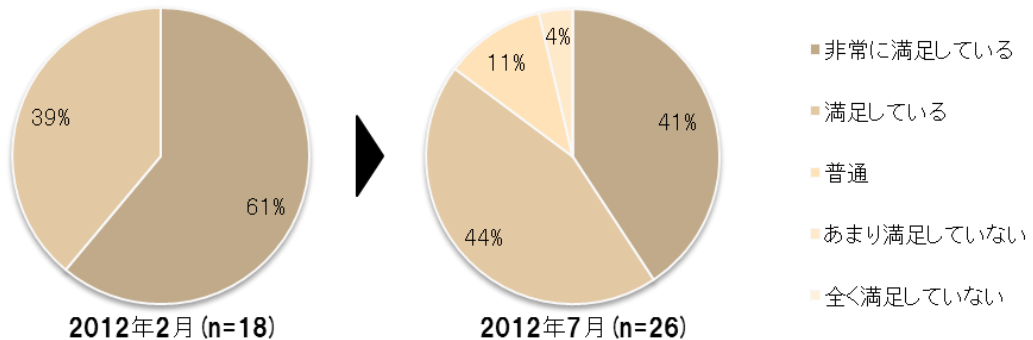


派遣先プロジェクトにおける右腕の貢献度

派遣先プロジェクトにおいて右腕が具体的にどのような貢献をしているかについて、右腕を受け入れている派遣先プロジェクトリーダー26名にアンケートに答えていただきました。(2012年7月実施)

- 派遣先プロジェクトリーダーの右腕の働きに対する満足度は85%が肯定的な回答となっており(【1】参照)、右腕が現地に役立つ形で活躍できているとの回答を得ています。
- 一方で、前回2月のアンケートに比べて、「普通」、「あまり満足していない」などの幅広い評価を頂いております(【1】参照)。こうした評価をいただいたのは、マッチングしたものの長期的な派遣に繋がらなかったこと、役割は果たしているが、期待にはあと一歩応えきれていない、ということが主とした理由でした。同様に、個別の評価項目においても評価は分散傾向にあります(【2】参照)。これは、被災地が緊急フェーズから復興フェーズに移り変わる中で、人材ニーズの質的变化が起こっていることが主な理由だと考えられます。
- 個別の項目を見ると、2月のアンケートに比べ、項目ごとの評価の差が少なくなっています。2月では他の項目に比べ、「当てはまる」の回答が少なかった「4 業務の仕組み化」、「5 相談できるパートナー」、「7 大局的なビジョン」は、今回のアンケートではいずれも20ポイント以上増加し、他の項目に並んでいます(【2】参照)。スキルの提供や事業の担当者としての役割に留まらず、組織にとって、より中長期的な成果を出すための人材として、価値を見出されはじめています。
- 今後も引き続き、より中長期的な復興に向けて、派遣先・右腕双方にとってより満足度の高いマッチングができるよう、移り変わる復興のフェーズに合わせて注力し、事業を行ってまいります。

【1】派遣された右腕の働きに対する満足度とその理由(n=26)



【2】事業や地域にとって、右腕受入によって向上した点や右腕が入った意義(n=26、[%])

■当てはまる ■やや当てはまる ■どちらとも言えない ■あまり当てはまらない ■全く当てはまらない

項目	当てはまる	やや当てはまる	どちらとも言えない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	
事業や組織にとって	1 事業・プロジェクトに対して新たな視点やアイデアが取り入れられた	53.8	26.9	11.5	3.8	3.8
	2 地元・団体には少ない能力やスキルを持った人材を事業・プロジェクトに投入できた	46.2	30.8	15.4	7.7	
	3 仕事のやり方や姿勢などの点で、共に働く仲間に対して良い刺激を与えられた	46.2	38.5	11.5	3.8	
	4 業務の仕組み化が進み、より効率的に業務を推進できるようになった	53.8	23.1	11.5	7.7	3.8
リーダー/経営陣にとって	5 リーダーが特定の日常業務などに拘束されることが減り、より自由度高く動けるようになった	53.8	26.9	11.5	7.7	
	6 困った時や迷った局面などで相談できるパートナーができた	53.8	23.1	11.5	7.7	3.8
	7 組織として、より大局的かつ長期的な視点・ビジョンを持てるようになった	50.0	23.1	11.5	11.5	3.8
地域にとって	8 より地域内外の人や組織と連携してプロジェクトを推進できるようになった	53.8	26.9	15.4	3.8	
	9 地域の人々を主体にした活動がより促進された	42.3	23.1	19.2	11.5	3.8
	10 若手人材により、地域に新たな良い刺激を与えられたり、地域により活気が生まれた	46.2	26.9	15.4	11.5	

リーダーからの声(抜粋)

【1】派遣された右腕の働きに対する満足度とその理由

「食の生産者と販売企業のマッチング事業を推進する上で、営業経験を生かして新規の販売先を開拓し、具体的な案件の成立に貢献している。」

「ひとりでは、できない成果、事業を進めることができた。ただし、スタートアップの組織において、パフォーマンスを出すための組織としての仕組みなどが弱く、個々の力を引き出しきれた状態ではない。また、精神的な浮き沈みが働きに影響をした部分があった。」

「地元人材では、担いきれないノウハウや行動力を持つ人材が、必要なタイミングで、来て頂き、地元へ多くのノウハウを提供していただいたため。また、私1名では担いきれないプロジェクトも右腕メンバーがいたため、積極的にチャレンジできた。」

「2名とも自分の長所を生かし、中間支援団体という私たちの団体を理解して派遣されていることから、即戦力として活動してくれている。また幸いに2名とも自分たちで問題を発掘する力があることから、団体としての動きが非常に活発になってきたと感じます。」

「人脈等がないなかで現地コーディネーターの役割を開始したが、短期間の間に地元との信頼・連携を構築し、重要な役割を担うまでに至っている。とくに、宮城県による仮設住宅の事業などにおいては、右腕人材の存在によって事業の成果に寄与した部分は著しいものと考えられる。また、右腕人材として事業を開始した流れを引き継いで、今後も地元に着目してリハビリ支援を主体的に計画中であり、起業という点においても可能性がでてきたことが評価できる。」

「昨年の5月よりプロジェクトを立ち上げ復興支援活動をやっていましたが、人手が足りなく、現場での活動をこなしていただけて終わっていました。右腕で人材が増えた事で、他のボランティア団体や復興プロジェクトに関わる方と情報交換や、今起きている現場での問題をシェアさせて頂く事ができました。その上で、今後の復興支援をどのような形でやっていくかモデルを創る事が出来ました。」

「募集時に期待していた以上の役割を果たして頂いている。自分たちに不足している部分を補うだけではなく、突発的に発生する課題に対する対応や、所属プロジェクト以外の事にも柔軟に対応するなど、打てば響く存在となっている。」

【2】事業や地域にとって、右腕受入によって向上した点や右腕が入った意義

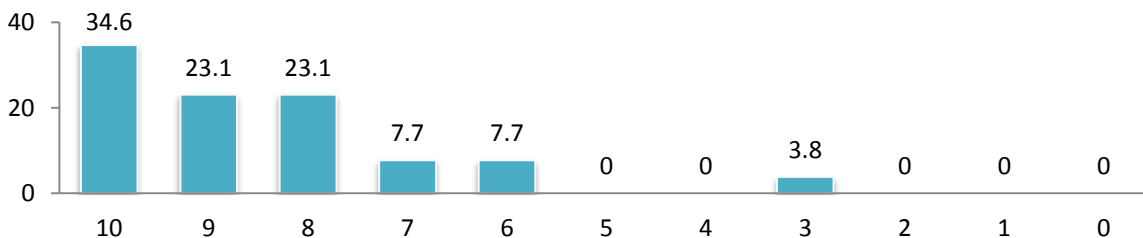
「新卒や学生インターンが主体となって日常業務が遂行されていた中で、社会人としての営業経験をもった方が右腕で入ってくれたお陰で、営業活動の確度が増した。」

「若手人材により地域に新たな良い刺激が与えられた、という部分はまさにそうだと思っております。若者が頑張っているから負けられん、と立ちあがる年上の方がたくさんいらっしゃいました。」

「地元と、全国からの支援希望者との間の連携がうまくようになった。」

「右腕人材については相当助けられているが、能力・スキルが高い分、右腕側の思いに応えられるだけの引き出しを現地のリーダーが持っているかが試される場面がある。その辺のコンセンサスを得るための初期段階でのコミュニケーションが重要となると思う。」

【3】右腕派遣プログラムを活用することを、同じような状況のリーダーに薦める可能性とそのポイント【10=非常に可能性が高い、0=非常に可能性が低い】(n=26、[%])



リーダーからの声(抜粋)

「資金的な問題と優秀な人材確保の観点から観点から雇用にて二の足を踏んでいる団体の課題を解決してくれる仕組みであり、派遣される側にとっても雇用ではない新しい関わり方で社会貢献、地域貢献できるという素晴らしい仕組みである点。」

「派遣される側と右腕は課題を共有でき、方向性を一致し、その上で右腕の能力がリーダーの不足を補えるようになると効果は非常に高い。そのマッチングはよくよく意思疎通しておくことが大事。」

「地元ではなかなか即戦力の人材がいな中、そういう方に巡り合える。また支援いただく期間の中で、とりあえずの件費をかけず事業を始めることができる。」

「問題になりがちな、孤立に対して、右腕仲間というコミュニティサポートがある点。また、事業のつながりとしても、ネットワークのメリットが大きい。」

※3を選択したリーダーからの改善への指摘

「情熱だけで人を雇用することは難しいので、その分野においてクローリングまでできるより復興に必要なスキルを持った人材が今後右腕に求められてくるかと思っています。」

本プロジェクトにご寄付をいただいているGlobal Givingより、現地の起業家への助成のお申し出を受け、「GlobalGivingコミュニティ元気ファンド」として右腕派遣先プロジェクトおよびリーダーから推薦のあった団体を対象に募集、次のとおり助成先を決定しました。更なる復興の推進へと投資的に活用し長期的に地域へ還元していけるプロジェクト5件を採択し、計750万円の助成を行いました。助成が決定した取り組みをご紹介します。

■ぐるぐる応援団(宮城県石巻市)

■プロジェクト内容

仕事や家族を失くした石巻のお母さん・お父さんたちの生活が自立的で、はり合いのあるものになるように応援することを目的として、石巻市役所一階に食堂「いしのまキッチン」を立ち上げた「ぐるぐる応援団」。



現在、津波による腐食のため使えていなかった食堂の半分のスペースを、体験・交流型のオープンキッチンとコミュニケーションスペースに変更し、地元の人々や石巻への観光客が交流を行える場、地元の女性が時間に縛られず仕事をシェアできる場を作ろうとしています。今回は、そこに設置する工具や用具設備投資に対して助成しました。

■特定非営利法人さんさんの会(岩手県大船渡市)

■プロジェクト内容

震災翌日、大船渡市内で大きく被災した方たちに向け、比較的被災の少なかった近隣の人たちの手で食べ物を作って配り始めたのが「さんさんの会」の活動の始まりです。その後、避難所で暮らす方々のために「おかず」を配食をするようになり、最大時には市内約60ヶ所の避難所に1日2400食の「おかず」を調理・配食してきました。現在は、減塩、低カロリーという高齢者ニーズに対応して、真空低温調理法を使用して食事を提供していくことを推進中。外部に委託していたこの調理法を現地で行って事業化し、地元雇用を生み出していくために必要な機材の購入費等を助成しました。

■東北ROKUプロジェクト(宮城県名取市)

■プロジェクト内容

『90年後の君へ』をコンセプトとし、東北の一次産業の復興と未来を創る子供たちに対して、食を通じて東北の文化や環境・福祉・防災などを学ぶことのできる6次産業商業施設の設置に取り組んでいる



東北ROKUプロジェクト。東北で10万人の雇用が失われている状況の中で、雇用創出を急務の課題ととらえ、被災者自身および市民が働く場をつくっていくということが重要であると考えています。今回は、6次産業施設のガーデン部分に、地域住民や観光客が自由に利用できるデッキや子供の遊び場を市民とともに設置するという、コミュニティスペース作りに対して助成しました。

■一般社団法人 ぶれいん・ゆに〜くす(宮城県仙台市)

■プロジェクト内容

東日本大震災で被災された自閉症/発達障害のあるご本人やご家族など、スペシャルニーズのある(生き難さを抱える)方々へのリソース提供や仕事の創生など総合的な支援活動を展開する「ぶれいん・ゆに〜くす」。被災されて仙台の新住民となったスペシャルニーズを持つ方々が新たな仲間と出会いエンパワメントされることを目指しながら、スイーツの開発・製作・販売活動を通して経済的自立を目指していく「虹のおかしやさん」の事業を新たに始めます。今回は、事業実施のために必要な製菓用の機材の購入費を助成しました。



■ほったて小屋(宮城県本吉郡南三陸町)

■プロジェクト内容

南三陸町戸倉地区は、東日本大震災により、高さ16mを超える津波が、最高到達地点27m、最長3km内陸まで川を遡上し、76%の建物を損壊した地域。本事業は、この地域の交通の要である旧ドライブイン跡地に「ほったて小屋」という浜の炭火焼き料理仮設店舗をつくるものです。体験談を聞きながら南三陸の海の幸を炭火焼きで味わい、周辺の宿泊情報などを知ることで出来る、町内外の人と人とを繋ぐ交流拠点を目指します。今回は、そのスペースとなるプレハブやトイレなどの設備費を助成しました。

東日本大震災から1年半が過ぎました。発災が遠い昔になるにつれて、当時の様子が人の記憶から薄れいく一方で、想いを持って立ちあがった多くの方々が、自身の体験を通じて成長し次の行動を生み出す原動力になっています。活動を終えた右腕のなかには、起業したり、東京に戻って長く地域に関わる在り方を見つけたり、多様な関わり方が生まれています。また、議論の場が協働を加速する動きも起きています。人が集まる場をつくることで、地域をどのようにしていくべきかという対話が生まれ、自身の事業をより高い視点から俯瞰していく。ただ人材を派遣するだけでなく、人との繋がりを通じて地域を支えていく取り組みを、ETICは今後も更に加速していきます。

■ アメリカン・エクスプレス・サービスアカデミー(6月22-24日)

■ 「サービス」を考え、次のアクションを創発する

昨年は社会起業家を対象としたプログラムに、東北の被災地から15名の方が参加しました。自らの事業の付加価値としての「サービス」を考えると共に、対話を通じた深い内省を通じて、自身の事業を洞察し新たな動きを創り出す場となりました。起業家に限らず右腕の皆さんも参加し、自身が携わっている事業をリーダーの目線から捉え直すことで、事業全体を考えようというべきかを考える契機になりました。



■ みちのく仕事マッチングフェア (7月1日)

■ 地域のこれからを共に拓く『右腕』募集

東北の問題は、近い将来日本が抱える問題。今の東北に関わることは、日本の未来に関わること。今回で4回目となった右腕派遣のマッチングフェアには、9プロジェクトのリーダーと111名の参加者が参加する盛会となりました。参加者は、今だからこそ東北の復興に携わりたいという気持ちや、震災で生まれた魅力的な機会だからこそ身を置きたいという想いなど、様々な動機を持ち集まっていました。パネルディスカッションで登壇した右腕で活動中の津野尾さんは、「右腕とは、組織や地域の当事者としてしっかりコミュニケーションを取り、自分がハブとなって外のリソースを使って繋げる約和知」と話します。今回参加された方々がプロジェクトに参画し、可能性を拓くことを通じて、中長期的な復興を支えていきます。

■ 参画プロジェクト一覧

- ・ap bank fund for Japan
- ・南三陸学びの里プロジェクト
- ・東北復興ポジティブエイジングプロジェクト
- ・雄勝アカデミープロジェクト ~こどもの教育支援を通じた復興~
- ・放課後学校「コロボ・スクール」プロジェクト
- ・いわきオーガニックコットンプロジェクト
- ・一般財団法人 地域創造基金みやぎ
- ・タダゼミ&ガチゼミ
- ・いわき市内におけるコミュニティ・スクールを核にした地域復興事業

■ 東北出身者のためのみちのく仕事論 (7月22日)

■ ふるさとにこそ、新しい可能性がある

夏の夜更け、渋谷にあるETIC.オフィスに、東北出身の方々、東北に深いご縁がある方々37名が集いました。多くが起業や右腕としての参加を検討しており、当事者意識が高く熱がある空間になりました。登壇された3名の方々も、皆東北出身。自分たちがどのような動機で現在の取り組みをしているかを話し、活発な議論が交わされました。その後、数個の輪をつくり、会場全体でダイアログ。現在の東北の状況や、そこに自分たちがどのように関わっていくことができるか、主体的な発想を分かち合い、期待が溢れる流れが生まれていました。東北にご縁がある方だけにお越しいただく会は初めての取り組みでしたが、次に繋がる価値ある時間だったと、多くの言葉をいただきました。



■みちのく起業合宿（7月25-26日）

■右腕から、起業家へ

NPO法人ETICでは東北の復興に向けての起業・事業創出を応援するプログラム「みちのく起業」(内閣府復興支援型地域社会雇用想像事業)を始めました。本プログラムは、特定の地域・課題分野に精通したメンターからのサポートや起業家同士の集合研修、起業のための250万円の支援金、東北の未来を共に創る仲間とのネットワークなどの機会を提供するものです。第1期ファンドでは26名の起業家が採択をされ、メンターや地域の仲間と事業をブラッシュアップする合宿に臨みました。起業家の中には右腕修了者も数名おり、右腕の活動を通じて、自ら価値を創造する側として起業する流れを今後も支えて参りたいと考えています。



■まちづくりダイアログセッション@仙台（8月12日）

■生まれ育った地域に関わる「働き方」を語る

「2030年、どんなまちで暮らしたいですか?」お盆の仙台、帰省された方々や休みなくプロジェクトに取り組む25名のみなさんと、上記をテーマに、これから暮らすまちを考えるダイアログを実施しました。一般社団法人ワカツクと協働し、宮城を拠点にまちづくりに取り組む3名の方をゲストとしてお招きしました。どんなまちが望ましいか、というビジョンから自由に考えて、自分のできることを探す時間を持ちました。この場をきっかけに、右腕にエントリーを決意した参加者もあり、エネルギーあふれる場となりました。



■みちのく仕事論 雄勝アカデミープロジェクト（8月24日）

■新しい教育の形から次代のまちづくりを考える

右腕を募集中のプロジェクトのうち、「雄勝アカデミープロジェクト～こどもの教育支援を通じた復興～」のリーダーを招いて活動紹介をおこないました。関係者である雄勝の教員の方と会場をスカイプで繋ぎ、お話を聞いたこともあって、参加者(22名)からは「現地の声を聞くことができよかった」「雄勝がぐっと身近になった」などの感想がありました。なぜ雄勝アカデミーが教育事業を展開しているか、雄勝において、どのような教育が求められているかなどを深く理解する場となりました。この日の参加者の中から、後日行われた現地訪問ツアーに参加した方も数名いらしたようです。



■いわて作戦会議（8月31日）

■地域からはじまる、住民主体の動きをどう支えるか

いわて連携復興センターの北上事務所で開かれた作戦会議には、岩手の復興に関わる13名の方々が参加しました。地域を支えるまちづくり会社をどのように作っていくべきかという話から、外から入ってきた人材をどのように受け入れていくべきかまで多様な話が展開されました。「地域」というひととくくりで人が集まる場をつくり、地産地消のコーディネーターを育てていく。互いに立場を越えて、岩手を支えていく取り組みを深く考え、今後の連携について具体的に話し合う場になりました。

■右腕合宿（9月2-3日）

■内省と客観視を通じて、次のアクションを創発する

今回で4回目の右腕合宿。恒例の宮城県秋保・木の家で開催されました。参加人数は43名。活動を修了した右腕も参加し、地域や役割、世代を超えて東北全体の取り組みを体感する場となりました。講師として、由佐美加子氏に越えいただき、右腕が深く内省し、自身の在り方を客観視する時間を設けました。例えば、団体における自身のステークホルダーを洗い出し、それがどのような関係性で、どうすれば関係性が改善され事業が進んでいくかなどのワークを実施。日常で立ち止まり、自身の行動を振り返る機会となったとの声が上がりました。右腕・ETICスタッフ共に、今の取り組みを少しでも良くしていくために、何ができるかと想いをめぐらす時間になりました。次回合宿は12月の開催を予定しています。



5 右腕派遣プログラムの進捗

2012年9月11日現在、右腕へのエントリー者数は累積283名、そのうち119名を右腕として現地へ派遣しました[緊急支援フェーズ20名、リーダー支援フェーズ99名(派遣決定者も含む)]。これまでの支援プロジェクト数は55、現在は30プロジェクトに45名の右腕を派遣中です。

6 ご支援・ご寄付のお願い

震災復興リーダー支援プロジェクトについては、スタート以来、国内外の個人・団体・企業の皆様より大きな関心を頂戴し、現在のご寄付の総額216,184,234円のほか、民間企業や国内外の財団から引き続き支援に関する照会をいただいております。しかしながら、右腕人材の派遣をはじめとして、現地で復興の取り組む人々からの支援のニーズは予想以上に高く、右腕派遣の目標を「50件のプロジェクトに200名」と当初の2倍に上方修正したことをはじめ、各右腕派遣先プロジェクトへのハンズオン支援の充実、新規団体のスタートアップ支援など、本プロジェクトの全体像の再構築に取り組んでいるところです。

目標の変更に伴い、総予算額も3年間で6億円以上の規模となる予定で、改めてファンドレイジング戦略の強化を実施してまいります。

皆様におかれましては、「震災復興リーダー支援基金」のPRへのお力添えをはじめとして、事業連携や各プロジェクトへの個別のご協力など賜りますよう、引き続きよろしくごお願い申し上げます。

信頼資本財団「震災復興リーダー基金」

≫ <http://www.shinrai.or.jp/fukkou-shien/etic2/>

連絡先・お問い合わせ先

◆NPO法人ETIC.内

震災復興リーダー支援プロジェクト 事務局

(担当:山内・辰巳)

東京都渋谷区神南1-5-7 APPLE OHMIビル4階

mail : fukkou@etic.or.jp

Web : <http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/index.html>